

花が綺麗に見えた

大桐信之助

今日は、なぜか空気が美味しく感じる。いつも通る裏山の小道なのに。「空気が美味しい」なんて感じた事は、生まれて初めてだ。子供の頃の環境が「感性」を狂わせたのか。六〇歳を過ぎてなんとなく、色んな事を感じ取れるようになった気がするが、花だけはいくら見ても「綺麗だ」などと一度も感じた事はない。僕には綺麗に見える事はない。僕が生まれたのは昭和二〇年一〇月。四歳の時に父が、五歳の時に母が病気で亡くなった。弟と妹は施設に預けられた。僕は伯父の家に引き取られた。伯父は父より三歳年上だった。父にはもう一人二歳年下の妹がいた。伯父には子供が二人いた。上の子が男の子で僕より四歳年上、下の子が女の子で僕より二歳年上だった。僕とは従兄になるが、一緒に遊ぶ事は全くなかった。伯父の家はかなり広かったが、僕は牛を飼っている納屋で寝ていた。納屋は土間だったが、板で床を造りその上に畳を二畳引いてくれていた。その回りに蚊帳を張っていた。ご飯は伯父の家族は伯父の家の居間のテーブルを囲んでみんなで食べる。僕はその蚊帳の中で一人で食べていた。蚊帳の中にみかん箱を二つ入れてくれていた。一つはご飯を食べる御膳、もう一つは服や下着を入れる箱だった。御飯ができたら、おばさんがみかん箱の上に持って来てくれる。当時みかん箱は木でできていて、とても丈夫だった。食べ終わったら御膳を家の玄関まで持って行く。家の中に入った事は一度もなかった。風呂は五右衛門風呂で、外にあった。みんなが入った後、おばさんが「入りなさい」と声を掛けてくれる。ここに来た日から、風呂の掃除、牛の世話もさせられていた。服も、靴も、そして、下着まで従兄のお下がりだった。農繁期にはよく手伝いをさせられた。その時は、おやつに芋餅を一つだけ貰えた。僕はずっと無口だった。話をしてくれる人がいなかったから。毎日伯父の家族に気を使っていた。

ある日、父の妹にあたる叔母がやってきた。叔母は二〇キロほど離れた村に住ん

でいた。叔母の家は大家族で暮らしも大変な為、僕を引き取れなかった。僕は生きて行くのが精一杯で自分が「みじめ」とか「悔しい」とか「寂しい」とか「悲しい」とか、よく分からなかった。誤って玄関のガラスを割った時は、夕食はなかった。おばさんが朝、御飯を持って来た時、起きていなかったらそのまま帰るので食べられない。ちゃんと起きて正座をして「ありがとうございます」と、両手をつけて頭を下げる。毎日、御飯が貰えるように全てに一生懸命だった。犬や猫と全く変わらなかった。僕より伯父の家に飼っている犬の方が大事にされていた。この日叔母は、僕の八歳の誕生日のお祝いに、二個入りのマルボーロを三袋持って来てくれた。この時、生まれて初めて笑顔が出たように記憶している。叔母のもう一つの目的は、僕を施設にいる弟と妹に合わせる事だった。別々に暮らし始めて三年になる。それに、叔母も体がだんだん弱くなるので、今の内に合わせておきたいと考えたのであった。

僕は、叔母と三時間ほど歩いて施設に着いた。施設ではみんな走り回って遊んでいる。弟も妹もおとなしい性格のようで、積み木で静かに遊んでいた。叔母はその姿を見て、涙を流しながら「可愛そう」「可愛そう」と何度も言っていた。でも僕は「可愛そう」とは思わなかった。「可愛そう」と言う事が良く分からなかった。「毎日、御飯を貰えるように」と、それしか考えた事がない。犬と全く同じような生活をしているのだから。本も読んだ事もない、学校にも行かして貰えない、ラジオはあったが聞いた事がない、話もうまくできない、ひらがなも読む事も書く事もできない。寒い時は納屋の壁の隙間をボロ布で塞いだり、服を沢山着て寒さをしのぐ。暑い時は裸になって暑さに耐える。将来の夢とか希望とか全くなかった。叔母は弟と妹を砂場に呼んで、僕に合わせた。「この子があなた達のお兄ちゃんよ」と言うが全くピンとこない。叔母は施設の先生に御土産を持って来ているようで、しばらく先生と話し込んでいた。叔母が砂場に帰って見ると、三人ともいなくなっている事にびっくりして探し始めた。教室の中を見ると、何も分からない僕に弟と妹が積み木の遊び方を教えてくれていた。弟と妹に別れを告げた時、胸が「キューン」とした。これが「寂しい」という事だろうと思った。僕は、施設で珍しい物を沢山目にし、手で触れ、人と会話をした事で大きく世界が変わったと感じた。それは、世の中に「楽しい」という事がある事を知ったからだだった。少し人間に近付いたような気がした。もう一度弟と妹の所に行きたくなった。いつも夜、空の星を見ていると、二人の事

を思い出す。伯父に許可を貰って月に一度二人に合いに行くようにした。二五キロの道のりを歩いていくのである。

二回目に一人で施設に行った時、大変な事が起こっていた。先生も子供達もみんな風邪をひいてしまい、普段五人いる先生が三人高熱で休んでいる。子供達もみんな寝込んでいる。僕は弟と妹を見つけ、すぐ駆け寄って額に手を当てた。二人共高熱だ。先生はタオルと洗面器を全部出してきた。そして僕は、バケツに水を汲んで来るよう指示された。二人の先生と僕でタオルを濡らし、二十数名の子供達の額に置いて行った。僕が熱を出した時、いつもお母さんがタオルを濡らして、額を冷やしてくれていた事を思い出していた。先生からの僕への次の指示は、お湯を沸かし、風呂を沸かし、食事の準備を手伝う事だった。僕は、弟と妹を気に掛けながら一生懸命手伝った。気がつけば夕方だった。帰らなければ怒られるが、この状況では帰れなかった。それに、電話も無く、連絡する事もできなかった。施設の先生に勧められて、その日はみんなで御飯を食べた後、施設に泊まった。先生の配慮で、妹を真ん中に兄弟三人並んで寝た。毎日こんな風に三人で暮らせたらいいのに、と思い、中々寝付けなかった。次の朝早く起きて伯父の家に帰ったが、無断で外泊した事に怒った伯父は僕の顔や腹を殴った。その時僕は、言葉もうまく話せなかったので状況をきちんと説明する事ができず、ただ殴られるままだった。そして、伯父の家から追い出されてしまった。下着を上下一枚ずつとボロボロのズボンを一本だけ紙袋に詰め、家を出た。

一人になってしまった。真っ暗な山道を一人で歩いた。弟と妹の顔が浮かんだ。合いたくて、合いたくて堪らなくなった。涙が止めどなく出た。寂しくて、寂しくて、大声で泣きながら施設に向かった。途中で柿を取り腹の足しにした。雨が降って来た。傘もカッパもない。びしょ濡れになって施設に着いたのは、真夜中だった。弟と妹は僕を見つけると、走って来て僕に抱きつき、泣いた。先生は、僕の腫れた顔を見てピンと来た。そして、村長に話してくれ、そのまま施設に入る事ができた。施設では、みんなより勉強は遅れていたが、根性だけは、誰にも負けない自信があった。また、兄弟三人毎日一緒に居られる事が何よりもうれしかった。この施設は中学まで居る事ができる。僕は、中学校を卒業後、住み込みで近くの建設会社に土木作業員として就職した。一生懸命働いてお金を貯めた。翌年、弟も同じ会社に就職して来た。妹が一人だけ施設に残った。僕と弟は、毎週日曜日に、自転車で妹に合

いにいった。帰りは、妹が寂しがって、僕達が見えなくなるまで涙を流しながら手を振る。そんな妹が可愛そうで堪らなかった。僕は弟と相談して、叔母の方の親戚の空き家になっている離れを安い家賃で、貸して貰う事にした。そして妹を引き取って三人で暮らせるようになった。妹は中学に通いながら、炊事、洗濯、掃除などよくやってくれた。御飯は薪で炊き、洗濯物は井戸水で洗い、よく頑張った。妹は中学を出てから、僕達と同じ会社の食堂で働く事になった。兄弟三人必死で働いた。

現在、弟と妹には孫がいて幸せに暮らしている。僕は弟と妹の親代わりをして来たため、お金も使い果たし、婚期も逃してしまい、結婚はできなかった。でも、「弟と妹を頼む」と言って息を引き取った母の思いに応える事ができた事が何より良かった。僕にとって「幸せ」とは、弟と妹が幸せになる事だから、自分の人生に大満足している。今日は、妹に二人目の孫ができたので、顔を見に行ってきた。妹にそっくりだ。その顔を見ていたら昔を思い出して涙が出た。子供の頃、色々お世話になった人、亡くなった叔母、三年間も育ててくれた伯父の家族。今は、みんな感謝できるようになった。今日の涙は感謝の涙だ。「あ、隣の花屋さんの花が眩しいほど綺麗だ」「花ってこんなに綺麗だったのか」感謝の涙が、僕の心の目を洗ってくれたのか。「綺麗だ、花が綺麗に見えた」